

時間と空間の分離を超える意識 — 臨死体験に関する一考察 —

齋藤 忠資

通常の世界では、我々は時間と空間によって制約されている。時間は過去・現在・未来に分離され、我々は過去と未来に行くことは出来ない。また空間は距離によって分離されているので、ここにいると同時に別の場所にいることは出来ない。しかし量子の世界には時間と空間による分離が存在しないことが現代物理学によって確認されている。一方臨死体験でも、この世界の時間と空間の制約から解放された自由な世界を垣間見たという体験例が報告されている。そこで時間と空間の分離を超える意識という視点から、両者の関連を考察してみたい。

I 現代物理学における非局所的連関と無時間性

J.Bell の定理に関しては、A.Aspect 等の実験と N.Gisin 等の実験によって、一度相互作用した二つの電子のスピンは、どんなに遠く離れていても、一方の電子のスピンを定めると、同時にまたいかなる情報やエネルギーの伝達もなしに、他方の電子のスピンの反対方向に定まることが実証された。¹⁾ R.Nadau と M.Kafatos によれば、J.A.Wheeler が考案した遅延選択実験の成功によって、過去・現在・未来という時間の分割のない無時間性の世界の存在が確認された。²⁾ ここで注意しなければならないのは、非局所性と超光速とは別であるという点である。分離した二つの電子は依然として一つのコヒーレント状態にとどまっていたり、絡み合っていて相互に連関にあった状態にある。³⁾ このことは、時間と空間に制約された通常の世界の背後に、過去・現在・未来という時間の分割のない無時間性の世界と空間の距離による分離というものがない非局所的連関の世界が存在することを示唆している。宇宙の根源は時間と空間を超えた所にあるが、その根源が時間と空間の枠内に局所化した通常の世界の出来事を生成しているのである。時間と空間の制約を超えた根源的な世界の科学的モデルの内、代表的なものを挙げてみよう。

D.Bohm と K.Pribram が唱える宇宙と脳のホログラフィックモデルでは、ホログラムは周波数領域であり、すべての事象が他のすべての事象に包み込まれて不可分の仕方で全体が相互に連関しているので、時間と空間の枠組みがない。⁴⁾

D.Bohm の主張する「はじき出された秩序」には、時間と空間の分離がみ等れるが、「包み込まれた秩序」には時間と空間の制約がない。神秘体験は、「包み込まれた秩序」を垣間見た体験であり⁵⁾、臨死体験ははじき出された秩序から包み込まれた秩序へと移行する出来事と解釈できよう。

M.-W.Ho によれば、量子コヒーレンス状態では時間の分離(過去・現在・未来)と空間の分離(距離)は生じない。⁶⁾ 生体は時間と空間を超えたコヒーレンス活動の量子的重なり合い(共存)であって⁷⁾ 生体ではどの部分も全体と時間と空間を超えて非局所的に、かつ同時に互いに連関し合いすべての部分も全体として一つに統合されてい

るので、非局所的かつ同時的相互コミュニケーションが可能であり、どの部分の反応に対しても全体として非局所的にかつ同時的に反応することが出来るとしている。⁸⁾ R.Dutheil は、超光速界では時間は空間化され、時間が流れることはなく、すべての事象が同時に生じるので、過去・現在・未来に同時にアクセスすることが出来、過去・現在・未来の制約はないという。⁹⁾

D.E.Watson は、4次元時空連続体では量子コヒーレンスが支配しているので、時間と空間の分離が存在しないが、波動関数の収縮によって脱コヒーレンスになり、時間と空間の分離のある3次元空間に移行するとみている。¹⁰⁾

D.Bessinger によれば、4次元時空連続をその一部として包括するような非局所的な多次元連続体を“nuocontinuum”と名付け、これが量子の Potentia の領域であり、時間と空間の制約がない世界であると主張している。¹¹⁾

P.M.H.Atwater は、真の根源的な実在には時間と空間はなく、その真の実在の波動から時間と空間が生まれ、振動は時間を、波長は空間を生み出し、振動数が変われば、時間と空間も変化し、包み込まれた周波数が変われば時間と空間も変化し、包み込まれた周波数帯域に共振すれば未来の記憶も可能となると解している。¹²⁾ プランク定数以下の領域には、通常的时间と空間は存在しないと考えられている。時間はないということは、時が流れることはないということである。時間の流れはエントロピーと関係しているから、時間がないということは、エントロピーがないということであり、エントロピーがないということは、老化や死がないということの意味している。どの形態も空間を必要としている。従って空間がないということは、形態がないということである。時間がないということは、過去・現在・未来という分離がなく、現在だけがあって時間が流れないので、現在は永遠ということである。(永遠の現在)。¹³⁾

II 時空を超えた意識

I では時間と空間を超えた非局所的な世界について述べたが、次に時空の制約を超えた意識の非局所的性質が問題になる。肉体は時間と空間に制約されているが、意識は時間と空間のバリアを超えて、過去と未来の事を考え、遠く離れたものを考えることが出来る。

H.Margenau によれば、物質の基本的構成要素には性格の同一性が存在し、また素粒子レベルでは異なる onta は統合されて全一性 (Oneness) を形成すると同時に個性性を保持する。¹⁴⁾そしてこの事実は Universal Mind (One Mind) の存在を示唆している。この Universal Mind には時間と空間はなく、すべての時間と空間を包含している。¹⁵⁾ Universal Mind には時間の制約はないので記憶の必要はない。¹⁶⁾人間一人一人の mind は本来 Universal Mind なのだが(非局所的)、実際には①タイムスリット②個という壁③量子力学の確率論的な壁という肉体的制約を負わされているが、¹⁷⁾人間の個人の mind は最終的には Universal Mind と合一する。¹⁸⁾

C.J.S.Charke によれば、Mind は量子の世界と同様に本質的に非局所的であり、Mind が発生する源である量子の世界には時間も空間もない。量子の世界が基本であり、ニュートンの世界はその特別なケースであって、分析の様々な方法は波動関数を問う問の様々なシェーマに他ならない。宇宙内の各々の状況では問のシェーマの

一つが選択されることによって、非局所性は崩壊して時間と空間が発生する。非局所的な Mind は局所的な物質と相互作用することによって知覚が生じ、空間的なアスペクトが生まれる (consciousness の生成)。¹⁹⁾

R.Sheldrake によれば、形態場は形態共鳴によって時間と空間をこえて非局所的な作用を及ぼし、不可視の相互連結を形成している。メンタル場も形態場の一つとして、そのような時間と空間の制約をこえた非局所的な場

を、例えば体外離脱の例にみられるように脳と身体をこえて形成している。²⁰⁾

R.Dutheil によれば超光速界には時間と空間の制約を超えた超光速意識が存在し、通常の物質界の意識もタキオンで構成されているので、肉体(物質)の制約内ではあるが時間と空間の制約を超えて思考したり想像したりできる特性を備えている。²¹⁾

D.Rakovic は、R.Penrose と同様に波動関数の世界は様々な時空幾何学が重なり合っている状態であるが、量子重力によってプランク定数のレベルで様々な時空へと分割すると考えてる。その際ワームホールが生じて、離れた時間と空間にトンネルを作るので、意識は時間と空間をトンネリングができ、時空を超えることができるという。これが臨死体験にみられるトンネル現象である。また重力によって生じる波動関数の収縮は、粒子のワームホールを開閉して続けることによって、非局所的意識と個人の意識とに関係してる。非局所的な意識は個人の意識すべての複合状態なので、個人の意識の変化は、非局所的な意識の状態に影響を及ぼすとみている。²²⁾

M.Germine によれば、量子の波動関数の崩壊は普遍的なメンタルプロセスであり、普遍的な波動関数においては mind の非局所性が存在するとして、One Mind モデルを提唱している。²³⁾

すでに I で紹介した D.E.Watson は、非局所的 mind が4次元時空連続界では非局所性と無時間性を備えていて(量子コヒーレンス状態)、肉体(物質)から独立しているが、3次元空間では時間と空間の分離状態(脱コヒーレンス)にあると主張している。コヒーレンスとは自己の部分集合が4次元時空連続界の自己と結合する能力のことで、こうして自己は時間と空間の制約から解放される。従って心身問題は二元論ではなく、二元的知覚であり、臨死体験は三次元空間から四次元時空連続界への移行現象であって、遠隔透視・予知・テレパシーが可能となると解している。²⁴⁾

同様に I で言及した D.Bessinger は、非局所的に普遍的な仕方で統合された量子意識が、脳のマイクロチューブルと結合水に生成されるボーズ・アインシュタイン凝集体によって発生するとみている。²⁵⁾

離れた人間同志の間に非局所的な仕方で相関し合った意識の反応が、すでに実験によって実証されている。²⁶⁾この点は臨死体験の場合では、言葉なしに時間を要せずに互いの思いが通じあえたといわれていることと関連していよう。臨死体験は時間と空間によって制約された物質状態から時間と空間の分離のない状態への変容であって、別の場所への移行ではない可能性がある。

Ⅲ 時間と空間の制約を超えた臨死体験の事例

A 時間と空間の制約を超える

肉体から離脱した非局所的な意識は、物質界の時間と空間の分離から解放され相互に結合し合っ、全体として一つの統合体を形成している世界に移行するので、時間の分離(過去・現在・未来)と空間の分離(距離)というものがない。臨死体験者の中には、どの場所にもまたどの時代にも行きたいと思うだけで瞬時に行けたと述べている人が多数いる。典型的な例をいくつか紹介してみよう。

体外離脱体験者の W.Buhlman によれば、時間と空間と形態があるのは物質界のことで、体外離脱後の非物質界には、時間も空間も形態も存在しない。²⁷⁾ 木内鶴彦は臨死体験をしたとき、“膨大な意識”と一体になった。「この“膨大な意識”は我々のいる時空を完全に超越した世界にあり、我々の住んでいるこの宇宙と、そのメカニズムもこの意識によって作り上げられコントロールされているかのように感じられた。そのため時間や空間と関係なく、この宇宙のいかなる時代や場所を想像したときでも、その場所を脳裏に映像として浮かび上がらせるが、意識だけの世界では、ある場所、ある時を思うと映像が浮かび上がるだけではなく、実際にその場所に瞬時に移動して見聞することができるのだ。」²⁸⁾ さらに「(体外離脱後は)いずれにしても空間を自由に飛び越えられるようで、身体は病室にいながら、行きたいところを強く思うと別の場所へ瞬時に移り変わるのである。つまり私の意識は空間や時間など関係なく移動することができるということになり、これはなかなか面白い現象だなと思えるのであった。」²⁹⁾ 「瞬時にして場所を移動できたり、さらに時間を飛び越えたり、時間と空間を自由自在に行き来できることに、私は強い興味をもった。」³⁰⁾ と記している。

別の例では「その時時間と空間はなかった。”あそこ”は私が”ここ”と思った瞬間”ここ”になった。”ここ”とか”あそこ”というのは、私という存在がその瞬間に定義する尺度にすぎない。」といわれている。³¹⁾ この例は時間と空間が人間の主観的な定義にすぎないことを示している。別の臨死体験者は「Being は永遠の今と分離していない。他のすべての beings の命と分離していない。そこでは時間と空間の妨害はない。」³²⁾ と述べている。この例は Being の世界には時間と空間の分離がないことを示している。「(臨死体験の)光の世界には時間と場所はなかった。」³³⁾ 「私は欲する所にどこにでも行けた。限界はなく自由であった。通常とは異なる timeless time と spaceless space があつた。」³⁴⁾ この「時間なき時間」と「空間なき空間」と言った表現は重要である。臨死体験が、垣間見た光の世界にも時間と空間はあるが、それは分離(過去・現在・未来と距離)を意味しないものであるということである。「時間もなく、人々の間の隔たりもなかった。」³⁵⁾ 臨死体験者 B.Brodsky は、死とは時間と空間のバリアを突破することだと言っている。³⁶⁾

G.Rodonaia は、三日間も死体安置所に放置されていたが、その間に「ロンドンやモスクワを訪ねた。どこでも即座に行くことができた。本当にそこに行った。…望めば叶えられた。思えば実現した。私はイエスや弟子たちの心の中に入った。彼らの会話を聞き、食事をし、ワインを飲み、匂いをかぎ、味わった。…私はローマ帝国、バビロン、ノアやアブラハムの時代を訪ねた。どの時代へも行けるのです。」G.Rodonaia は私たちの時間と空間から解放され、何でもできると感じた。同時にあらゆる場所に出現できる多次元同時性により短時間で千年分の経験ができた。数百年前に亡くなった親族の中にさかのぼり、まるで彼らと一つになったかの様だったと述べている。³⁷⁾

B 無時間性

肉体から離脱した非局所的意識は、過去と現在と未来という時間のバリアはなく、過去と現在と未来が不可分の仕方で統合されているので、そこには永遠の現在しかなく、時は流れず、誕生・成長・老化・死ということもない。³⁸⁾すでに考察したように、臨死体験者は過去にも未来にも自由に行くことができたと言われている。

それ以外の臨死体験の代表的な例をいくつか挙げてみよう。最初に C.Jung は自分の臨死体験について次ように述べている。「…私にとってこの経験は、現在・過去・未来が一つであるような無時間状態のエクスタシーとしか言いようがない。時間の中で生じたものがすべて、その状態では具体的な全体性へと集中して一つに統合される。時間の中に区分されることもなければ、時間概念で測られうるものもない。…人は言い表し得ない全体の中に織り込まれ、しかも全く客観的にその全体を観察する。」³⁹⁾

別の臨死体験者は「あのもう一つの次元へ行った時には時間の感覚がなかったこと…時間を超越してあれだけ多くの知識が体験できたと言うこと…愛と光が私の知りうる限りのことを、それもこの世の世の生活に戻って来られる内に教えてくれている間時間は止まったかの様でした。」⁴⁰⁾と言っている。

高木義之は、臨死体験の時の状態を次の様に記している。「過去・現在・未来はなく、すべてが現在である。つまり過去・現在・未来は一つにつながったものである。例えるならば、マンダラの絵のようなもの。過去・現在・未来は同時にすべてを認識することが出来る。」⁴¹⁾「ここには過去・現在・未来という時間の流れもない。例えるならば、すべて現在である。時間は意識の中に認識としてだけ存在する。光の世界はゼロ次元である。ゼロ次元というのは空間も時間もないという意味である。光の世界には何も無い。あるのは意識だけである。」⁴²⁾

その他の例を挙げてみよう。「(臨死体験で垣間見た世界では)時間は止まっていた。意識は線形的時間を超えた次元で存続していた。そこでは過去と現在と未来が一つになって永遠の現在となっていた。永遠が現在となり、今は決して終わることはない。」⁴³⁾「光に包まれると我々の知っているような時間は存在しなかった。過去・現在・未来は解けて一つの瞬間になっていた。」⁴⁴⁾「時間は止まっていた。過去・現在・未来は時間のない生命の統合の中で一つになっていた。」⁴⁵⁾「現在・過去・未来が一つであるような同時状態のエクスタシーとしてこの体験を表現できる。」⁴⁶⁾「線的な時間の枠組みはなかった。すべての事が一度に生じる。しかし何の混乱も生じない。時間の経過は霊的な覚醒のレベルに達することはない。」⁴⁷⁾「光の世界とトンネルには、時間はなかった。」⁴⁸⁾

C 非局所性とテレポーテーション

肉体から離脱した意識は、物質界の時間と空間の分離から解放されるので、時間と空間の分離といったものはなくなり、相互に結合しあって全体として一つの統合体を形成している世界に移行する。従って空間的には視覚を妨げるものはないので、完全視覚(具体的には遠隔透視・内部透視⁴⁹⁾・360度完全視野⁵⁰⁾と、距離というものがないので、テレポーテーションが可能となる。時間も全体として一つに統合されている

ので、未来と過去を知ることができる。未来と過去を知るとは時間上の完全視覚（透視）と解することができる。⁵¹⁾ 未来と過去を実際に体験したとすれば、それは時間上のテレポーテーションということになる。いずれにしても透視の場合には超感覚的な知覚が問題になっているのに対して、テレポーテーションの場合には単に超感覚的な知覚だけではなく、空間上の移動が問題になっている。

現代物理学でも、光子の量子力学的状態を変えずに、別の場所に伝送する実験に成功している。⁵²⁾ 量子は、時間と距離に関係なしにジャンプする。⁵³⁾ 量子ジャンプでは量子が異なる二つの地点間を通過することなしに、A 地点で消えると時間の経過なしに B 地点に出現する点からみると、テレポーテーションでは量子ジャンプが問題になっている可能性がある。この場合には移動する二点間のプロセスは一切問題にならない。体外離脱した非局所的意識が異なる場所に瞬間移動したとすればテレポーテーションであり、移動しなければ遠隔透視であるが、臨死体験の事例の場合その点が明確でないケースが多いので、テレポーテーションと遠隔透視を区別することは実際には困難である。⁵⁴⁾ 臨死体験者が垣間見た世界でも体験者は明らかに空間上の瞬間移動を体験しているが、その空間には距離による分離はなく”距離のない空間”なのである。

いずれの場合でもすでに考察したように体外離脱した非局所的な意識は、通常の五感では直接知り得ず想像もできないような特異な情報を正確に入手している例が多数ある。⁵⁵⁾ さらにたとえば地上では一度もみたことのない死んだ親族と出会って、その人が誰なのかがわかったり、臨死体験者本人には知らせないでいたにもかかわらず知人が突然死んだことを臨死体験中にわかってしまったり⁵⁶⁾、まだ生まれていない自分の将来の子供と臨死体験中に出会うといった通常の感覚では知り得ない情報を入手している例が報告されている。また臨死体験では本人の過去と未来の姿が瞬時に映し出される (life review と life preview) という例が多数みられる。⁵⁷⁾ これらは非局所的な意識の知覚が時間と空間の制約を超えていることを示している。

D すべてがいつでもどこでも同時に

肉体から離脱後の臨死体験の世界は、個は存続するがすべてのものが相互に関連し合って、不可分の仕方ですべてのものが一つの統合体を形成しているので、時間と空間の分離というものがない。時間と空間の分離がないということは、すべての事象がどこでも又いつでも同時に存在するということである。K.Ring は臨死体験の世界の特徴の一つとして「宇宙は同じ織物から織られている一つの壮大なもので、時間と空間は幻想であり、時間と空間の外ではすべては同時に現存している」ことを挙げている。⁵⁸⁾ 臨死体験の典型的な例をいくつか挙げてみよう。

「過去・現在・未来の宇宙全体が一つのセンターに収れんし、一つの不可分の全体をなしていた。すべてはこのセンターに依存しており、このセンター自体は不変であった。それは純粹意識の光であり、それがすべてのものを照らしていた。すべてのものがすべての中にあり、それは万物を含む nothing であり、a thing ではなかった。」⁵⁹⁾ この事例は宇宙のすべてを収れんするセンターがあり、それは純粹意識の光りであり、a thing ではなく nothing であると述べており、非常に重要である。

D.Morrissey は「体外離脱体験は、過去と現在と未来の境界がないことを示している。すべては時間上の制約なしにある場所に即座に示される」と証言している。⁶⁰⁾ 別の例では「・・・すべてのある時点で、そこにあった。一度にすべてがそこにあった」と言われている。⁶¹⁾ W.Buhlman も体外離脱後の世界ではすべてのものがここに今存在していると言っている。⁶²⁾ 臨死体験ではないが、超自然的な光照体験をした N.Clark は、「光と共に天井を抜けて上空へ上がって行った。目の前に広がる多次元の宇宙に驚異を感じた。少なくとも10次元はあるようだった。時間と空間は存在しなかった。何もかもが同時に起きた。・・・光は内的宇宙と外的宇宙の無限のエネルギーが集約したもの」と述べている。⁶³⁾ 臨死体験によくみられる全生涯の展望(過去の回顧と未来の姿)も体験者本人の全生涯が時間と空間の制約を超えて、一度に示される例である。

結論

以上によって考察を終えたので、最後に結論をまとめてみよう。

1) 現代物理学の量子力学の分野では、ペアの電子の非局所性と無時間性が実証されている。ペアの電子は、遠く離れていても何ら時間を要せずに相互に関連し合っている。このことは物質の世界の根源には、時間と空間の分離のない世界があることを示唆していよう。過去・現在・未来という時間の分離がないということは、現在しかなく今が永遠であるということである。又時間が流れないと言うことは、誕生・成長・老化・死というものがなく、エントロピーの増加もないということである。さらにどの固定した形態も空間を必要としているので、空間の分離(距離)がないということは固定した形態も存在しないということである。固定した形態がないということは、臨死体験の世界がホログラフィック宇宙であることと関連している。

2) 意識は肉体という物質界の制約を受けているが、本来時間と空間の制約を超えて思考したり想像したりできる特格を備えている。これは意識が何らかの仕方で、時間と空間の分離を超えた量子の世界と関連していることを示唆している。個人の意識は普遍的な宇宙意識を何らかの仕方で反映している可能性があろう。肉体を離脱して、意識のみが臨死体験の世界に移行するのは、このことと関連していよう。

3) 肉体(物質)から離脱すると、意識の非局所性は明確になる。臨死体験の事例は、そのような非局所的な意識が物質界の時間と空間の制約から解放されていることを示している。非局所的な意識には、時間と空間の分離がないので、完全視覚(遠隔透視・内部透視・360度完全視野・予知など)とテレポーテーションが可能となる。また臨死体験者が垣間見た世界では、時間と空間による分離がないので、すべてのことがいつでもどこでも同時に存在し出来事になることが可能である。

4) 臨死体験者が意志の自由を感じるのは、物質界の時間と空間の制約から解放されるためである。時間と空間の分離がないということは、因果律がないということである。時間の流れがないのであれば、記憶の必要もない。また距離による隔たりがないということは、すべての物体を素通りし、テレポートすることが可能である。臨死体験の例には、テレポーテーションが多数みられるが、テレポーテーションは空間を前提しているから、空間は存在するが、空間の分離(距離による隔たり)は存在しない。

臨死体験の世界にも出来事の順序というものはある(たとえば人生回顧のシーンで)。しかし時間による分離というものはない。

【註】

- 1) R.Nadeau and M.Kafatos,The Non-Local Universe,Oxford University Press,1999,69~81.
A.D.Aczel,Entanglement,Four Walls Eight Windows,2001.
- 2) Non-Local,69~81.185~190.
- 3) Mae-Wan Ho,The organic revolution in Science, www.ratical.org/co-globalize/MaeWanHo/organic.html; Toward an indigenous western science in W.Harman(ed.) New Metaphysical Foundations of Modern Science, Institute of Noetic Sciences,1994,206.
- 4) この点については、拙論、ホログラフィック宇宙と臨死体験の世界、人間文化研究11, 2002, 31~50.
- 5) K.H.Pribram,Holographic Memory,Psychology Today 12,1979,83~84.
- 6) The Rainbow and the Worm, World Scientific,2nd.1998,206.241~242.
- 7) Rainbow,93.213~214.
- 8) Rainbow,177~178.195.212~214.
- 9) E.E.Valarino,On the Other Side of Life,Plenum Press,1997,212~214.
- 10)Enformy and enformed gestalts,www.sunflower.com/~dewa.
- 11)Time for eternity,http://users.aol.com/projbin/qm-plik4.htm
- 12)未来の記憶、原書房、1997, 151~152. 169. 280~ 283.
- 13)永遠ということは時間が無限に続くことではない。
- 14)The Miracle of Existence, Ox Brow Press,1984,4~5.107.
- 15)Miracle,120~121.
- 16)Miracle,126.180.
- 17)Miracle,120~123.
- 18)Miracle,125.
- 19)The Nonlocality of Mind, J.of Consciousness Studies 2,1995,231~240.
- 20)シェルドレイク、あなたの帰りがわかる犬、工作舎、2003, 389~409.
非局所的意識は普遍的意識ではないとシェルドレイクはみている。(Prayer:A challenge for science,Noetic Sciences Review 30,1994,4~9.
- 21)E.E.Valarino,Other,193~225.
- 22)Consciousness mediated quantum gravitational collapse via generated wormholes,Proc.joinf.conf.information sciences 2, 1998, 265~268.
- 23)Experimental model for collapse of the quantum wavefunction,www.goerzel.org/dynapschc.
- 24)D.E.Watson,G.E.Schwartz,and L.G.Russek, A comprehensive theory of consciousness I, www.sunflower.com/~dewa; The theory of enformed systems,The Noetic Journal 2,1999,159~172.
- 25)Time,.

- 26)D.I.Radin and R.D.Nelson,Evidence for consciousness, Foundations of Physics 19,1989,1499~1514; J. Grinberg-Zylbaum, and et all, The Einstein-Podolsky-Rosen Paradox in the brain, Physic Essays,7,1994,422~428.
- 27)The Secret of the Soul,Harper San Francisco,2001,20.27.70.143.147~148.
- 28)宇宙の記憶、龍鳳書房、1995、93.
- 29)宇宙、40~41.
- 30)宇宙、89.
- 31)Some thoughts on my near death experience,web.triton.net/potentialspas/kessays/neardead.htm
- 32)J.Star's NDE,www.near-death.com/star.html
- 33)R.Wallance, The Burning Within, Gold Leaf Press,1994,107.109.
- 34)Lana's NDE , www.nderf.org/lana's nde.htm
- 35)N.M.Spurgin, Insights into the Afterlife 30, www. fparents.org / Library / Unification / Books / Afterlife / Question. htm
- 36)Near death Experiences and the Afterlife,www.near-death.com/experiences/research10.html
- 37)P.M.H.Atwater,Beyond the Light, A Birch Lane Press Book,1994,74~75.
- 38)すでに指摘したように、永遠とは時間が無限に続くことではなく、時間がなくなることである。
- 39)ユング自伝Ⅱ、みすず書房、1973、133~134.
- 40)片桐すみ子編、輪廻体験、人文書院、1991、82.
- 41)転生と地球、PHP研究所、1997、111.
- 42)転生、110.
- 43)G.Landry'sNDE, www.near-death com/landry.html
- 44)L.Martin,Searching for Home,Cosmic Concepts,1996,16.
- 45)Ph.L.Berman,The Journey Home,Pocket Books,1996,35.
- 46)B.C.Topp and Top,W.C.,Beyond Death's Door,UT:Bookcraft,1993,132.
- 47)J.C.Wintek, A Precious Encounter on the Other Side,Dogwood River Publishing, 48.
- 48)S.S.Farr,What Tom Sawyer Learned from Dying, Hampton Roads Publishing Co.,1993,28.
- 49)すべてのものが透明であるということになる。
- 50)内部透視と360度視野については、拙論、4次元空間と臨死体験、人間文化研究 9, 2000, 2~4 と 14~18 をみよ。
- 51)透視や予知と言った非局所的知覚については、D.Radin, The Conscious Universe, Harper Edge, 1997.をみよ。
- 52)A. ザリンガー、量子テレポーテーション、日経サイエンス、2000年6月、20~38.
- 53)T.E.Beck and J.E.Colli, A quantum biomechanical basis for near-death life reviews, J.of Near Death Studies 21,2003,178.
- 54)遠隔透視とテレポーテーションについては、拙論、ホログラフィック宇宙、37~42 をみよ。

- 55)拙論、夢(幻覚)と体外離脱について、人間文化研究 2, 1993, 53~72; 体外離脱は幻覚か? 人間文化研究 3, 1994, 55~80; 確証された臨死体験の 知覚、人間文化研究 6, 1997, 53~76.
- 56)拙論、死んでいたことを知らなかった死者のヴィジョン、人間文化研究 5, 1996, 35~60.
- 57)この点については拙論、4次元空間、6~14; ホログラフィック宇宙、36 をみよ。
- 58)Lessons from the Light, Insight Books, 1998, 298.
- 59)When Time Stood Still, www.nderf.org/When-Time-Stood-Still.htm
- 60)You Can See the Light, Stillpoint Publishing, 1997, 72.
- 61)D. Darling, After Life, Fourth Estate, 1995, 155.
- 62)The Secret, 132.
- 63)P.M.H. Atwater, Beyond, 88~89.